

Kitasato Memorial Medical Library

F  
才-6

499.7  
Ob

No. 5047



富士川文庫

3377

賞

時疫流行の良し薬を用いて主症をのぞく

一 時疫より大流行するを止むるに用いては、  
少くともその病を止むるに用いては、  
右醫酒小出

右醫酒小出

一 時疫より若者の根を断つておこなう

多くは、  
右醫酒小出

右醫酒小出

一 時疫より、午房と片手、くさくさ入汁と志保り

茶碗も多し二夜飲て一と一葉の葉を二杯  
而も火を能くしき 其の流く如く所茶碗  
水を置入二盞とせしめて一盞飲て汗を  
てしし 着衣のそよあしくしし ねを  
てしし

石塚山人食忘書

一 時腹中くたつて中つてし まらぬのころ  
たきまきくくくくくくくくくくくくくくくく  
汁とちりくく飲てしし  
石塚後傳忘書

一切の食物の毒くくくくくくくくくくくく  
きののこ魚くくく 熱くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくく

一切の食物の毒くくくくくくくくくくくく  
湯とちりくくくくくくくくくくくくくくく  
徒草木の葉を以て冷めて毒くくくくくくくく

石塚政全牛書

一切の食物の毒くくくくくくくくくくくく

一 湯瀉のしるし 若參と水をもりて之を飲ハカ食キ

### 右目

一 一切の食をとりてしるし 湯瀉のしるしと水をもりて之を飲食せしむ

### 右中平細目

一 一切の食をとりてしるし 湯瀉のしるしと水をもりて之を飲食せしむ

### 右衛エロフイカシ易筒

一 一切の食をとりてしるし 湯瀉のしるしと水をもりて之を飲食せしむ

一 湯瀉のしるし 湯瀉のしるしと水をもりて之を飲食せしむ

一 湯瀉のしるし 湯瀉のしるしと水をもりて之を飲食せしむ

一 一切の食をとりてしるし 湯瀉のしるしと水をもりて之を飲食せしむ

一 湯瀉のしるし 湯瀉のしるしと水をもりて之を飲食せしむ

一 湯瀉のしるし 湯瀉のしるしと水をもりて之を飲食せしむ

一 湯瀉のしるし 湯瀉のしるしと水をもりて之を飲食せしむ

一 湯瀉のしるし 湯瀉のしるしと水をもりて之を飲食せしむ

のしけとのこそし

石夷堅志

有る薬方は古くより傳へられたるもの新令の毒なり  
 のり又も凶事には必夜病流ひるものなり  
 筒便方と稱せらるる信は 此方諸書にあり  
 此方出也

享保十八年三月二十日

年月三英

丹羽正伯

○痔の薬

一 下血先便後血は遠く是れ方々なる薬也

鯨白

薑七湯

其草

乾地薑

白朮

附子

阿膠

蒼朮

寗中薑

右の伝法行と云ふは水に煮て之を二斗に煎じて  
 之を煮て七日すべし

○高麗参の用法

高麗参は古くより傳へられたるもの新令の毒なり  
 此方出也

○ 宿の茶の類 雜草等 碎子 種子 大粒 胚 入り 又 雜草  
大粒の茶の類 雜草等 碎子 種子 大粒 胚 入り 又 雜草  
雜草等 碎子 種子 大粒 胚 入り 又 雜草

○ 宿の茶の類 雜草等 碎子 種子 大粒 胚 入り 又 雜草  
雜草等 碎子 種子 大粒 胚 入り 又 雜草

○ 宿の茶の類 雜草等 碎子 種子 大粒 胚 入り 又 雜草  
雜草等 碎子 種子 大粒 胚 入り 又 雜草

○ 宿の茶の類 雜草等 碎子 種子 大粒 胚 入り 又 雜草  
雜草等 碎子 種子 大粒 胚 入り 又 雜草

御抄行

宿の茶の類

雜草等

碎子

種子

大粒

宿の茶の類

雜草等

碎子

種子

大粒

宿の茶の類

雜草等

碎子

種子

大粒

宿の茶の類

雜草等

碎子

種子

大粒

宿の茶の類

雜草等

碎子

種子

大粒

宿の茶の類

雜草等

碎子

種子

大粒

病を治す

一 宜分... 治す... 宜分... 治す... 宜分... 治す...



宜分の薬

一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分...

一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分...

宜分の薬

一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分...

一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分...

一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分...

宜分の薬

一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分... 一 宜分...

一 上病 任息はしむ 文 一 玉切チ けり 玉切

一 名物 殊 九分 一 鴉卵 七ツ

右 四味 殊 上 切

右 七 折 方 規 力 以 傳 一 人 あり あり あり あり あり

○ 瘧の草

一 魚柳 魚 耳 草 卯 中 葉 卯 何 者 抄 外 傳

○ 少年の草

一 一 種 一 種 一 種 一 種 一 種 一 種 一 種 一 種 一 種 一 種

き 主 功 効 見 込 る 所 も 交 互 以 由 来 考 又 鴉 卵 の 形 七  
る 所 考 也 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考

○ 婦人の草

一 牛 乳 の ぬ る 身 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考

○ 瘧疾の草

一 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考

一 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考

一 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考



石松をそらふての膝うさわさのうらりの膝なり  
 ろぐり立ちのあこをわとまおをかろをんていん  
 ちおちのひんねんふ人おのる人おる人ちやあ  
 ろれ事おらり

一 紙おれおしあやのこころあ入るどらたてんていん  
 ちあうらあをまひいりたん徳あゆみ紙あま  
 われしにやんねんちるさうをねね徳おれはあま成  
 ちね徳くまもあをさくゆすくち場ちあま  
 ちあふくもねねあありてみち場あけちり  
 ふに中をまふ二一ちあらま

○ 中凡書

一 紙おれおしあやのこころあ入るどらたてんていん

○ 場あけ

一 燕さあのをまんとあな言解さるどらてんていん

○ 紙場あけ

一 石松をそらふての膝うさわさのうらりの膝なり

一 福あまのこころあ入るどらたてんていん

○ 葛根の葉

一 葛根の丹根は、その根を切ると、葉は、  
のろろと、汁を食は、  
多神の、  
ある、

○ 病を治す薬

この薬の、  
あり、

一 黄連 芍薬 枳壳 茯苓 前胡 耳葉

石菖蒲 右の薬を、  
二、

○ 食傷

一 白胡椒、

○ 田中

一 日、

○ 口乾熱

一 口乾熱、

○ 吐瀉

一 吐瀉、  
し、

〇 ちぢるじ草

一 茎の形を好むと云う。花は其の形に似たり。

〇 病の草

一 水<sup>切色</sup>花<sup>切色</sup>の形は花の形に似たり。花の形は花の形に似たり。花の形は花の形に似たり。

〇 ちぢる草



一 花の形は花の形に似たり。花の形は花の形に似たり。花の形は花の形に似たり。

右の草を人々をいふ。その草は花の形に似たり。

其の草は花の形に似たり。花の形は花の形に似たり。花の形は花の形に似たり。



けり草の形に似たり。



けり草の形に似たり。

右の草は花の形に似たり。花の形は花の形に似たり。花の形は花の形に似たり。

陰の如くは

一 乃をきわ川をきりて者もはるる

○子よめのの草

一 乃中なる子よめのの草もくもくふるふる麻の如くともは  
こころしくはるる

○ 板倉路の海牛の如くはるる

しるる

一 乃甲の如くはるる

○ 魚の目

一 乃じの葉もみしるる

○ 痔の草

一 乃なるもみしるる  
乃麻なるもみしるる  
乃よもみしるる  
乃をきりて者もはるる

○ 乃の草

一 乃の草もみしるる  
乃の草もみしるる

一 種々の毒草

一 雞卵のほろとろと何ヶ、口内と喉の  
苦味と何と苦味と苦味と苦味と苦味と  
何と何と何と何と何と何と何と何と何と何と  
何と何と何と何と何と何と何と何と何と何と

○ 毒草と毒草

一 毒草と毒草

○ 毒草と毒草

一 毒草と毒草

一 毒草と毒草

一 毒草と毒草

一 毒草と毒草

一 毒草と毒草

一 毒草と毒草

一 毒草と毒草

一 梅子の葉

一 雞卵 わがまをいんをのけの白皮をとぼき

一 苦竹 山草の 厚皮をいん

一 厚皮 イワサネの 厚皮をいん

一 竹葉 竹葉をいん

一 厚皮 厚皮をいん

一 法 右のいんをいん

一 雞 又いんをいん 後右草

一 梅 をいん

一 厚皮 厚皮をいん

一 竹葉 竹葉をいん

一 厚皮 厚皮をいん

一 竹葉 竹葉をいん

一 厚皮 厚皮をいん

一 竹葉 竹葉をいん

一 葉

一 葉

一 梅子の葉

一 雞卵の皮をとりて湯でゆき、白皮をとりて煮る

一 薑の皮をとりて湯でゆき、白皮をとりて煮る

一 栗の皮をとりて湯でゆき、白皮をとりて煮る

一 栗の皮をとりて湯でゆき、白皮をとりて煮る

ゆき

一 湯

ゆき

一 湯

ゆき

一 湯

ゆき

一 湯

ゆき

一 湯

ゆき

ゆき

一 湯

一 梅子の葉

一 雞卵の皮を剥き、その殻を砕き、水を加えて煮る。

一 苦味

一 厚皮

一 皮

梅子の葉は、苦味、厚皮、皮、又花の皮、とく、おもしろい。大に、おもしろい。二、三、おもしろい。又、おもしろい。とく、おもしろい。大に、おもしろい。

一 梅子

一 梅子

一 梅子と、その皮、おもしろい。

一 梅子の皮

出雲の梅子

一 梅子の皮、おもしろい。



一 解毒の草

一 雞卵の皮を煮て飲めば、口乾くと痰を吐く

一 苦味と酢を煮て飲めば、口乾くと痰を吐く

一 酒を焼くことし、口乾くと痰を吐く

一 湯を煮て飲めば、口乾くと痰を吐く

○ 苦味と酢を煮て飲めば、口乾くと痰を吐く

一 湯を煮て飲めば、口乾くと痰を吐く

○ 苦味と酢を煮て飲めば、口乾くと痰を吐く

一 湯を煮て飲めば、口乾くと痰を吐く

○ 苦味と酢を煮て飲めば、口乾くと痰を吐く

一 湯を煮て飲めば、口乾くと痰を吐く

一 湯を煮て飲めば、口乾くと痰を吐く

○ 苦味と酢を煮て飲めば、口乾くと痰を吐く

一 湯を煮て飲めば、口乾くと痰を吐く

膝をの申の膝を七種好して根を  
尖、刀打のゆきさい出ん  
外、竹の波矢は、不審に

なきおし流

一 この白濁の目と鼻と喉とを治す  
尖と刀とと憎むくこの西と出と治す  
泰下の治す

うらぶらぶらこい

一 うらぶらぶらこい

一 白濁の神のち  
治す

ゆきおし流

一 杉の子 山椒 大葉 金魚

右の葉をこしてゆき  
素の夜葉

一 子 羽 巴 之 注

二 京 糸 子 能 煉 子 の  
治す

○ 該藥茶

按石竹

一 荆防敗毒散 柴胡 茯苓 川芎

桔梗 前胡 羌活 獨活 枳殼

荆芥 忍冬 防風 連翹 石四身斗

耳草 是牙 貳身

石竹

右二身一 身少 身斗 身斗 身斗 身斗

血積

石竹

一 楊枝茯苓丸 車桑 柳枝 茯苓

牡丹皮 桃紅 芍藥 石五身斗 石五身斗

一 蜜糖 身斗

為飲

石竹

一 蔓草 身斗 身斗

○新子

〆〆〆

一 五猪散 是久十五煉 是二 苗香 柳紅 加

○月無子 乃一 葉

〆〆〆

一 財令天 補湯 是少 葉湯 下之 〆〆〆

〆〆〆

〆〆〆

一 法照肉 乃中 ころ じが 〆〆〆

〆〆〆

〆〆〆

一 石菖 〆〆〆 〆〆〆 〆〆〆

〆〆〆 〆〆〆 〆〆〆 〆〆〆

〆〆〆 〆〆〆 〆〆〆 〆〆〆

〆〆〆 〆〆〆

〆〆〆

一 十 〆〆〆 〆〆〆 〆〆〆 〆〆〆

右の薬を茶

亥二日十二分付

吐瀉年々茶

一辰砂一兩目

一ジャ香編

羊羹  
油煎し

右二味

抄り茶

流し

多熱とナシ茶

一モグサ

コロ杯

串刺

二品茶

左のふり

痧の痛

一ニカワ

黄バク

二品

左のふり

麻

一物

左のふり

漬栲草治積

一 水に切りて積の葉を漬して食ふと積を治す

○ 新し茶葉 施茶

一 任き方何れも積を治す。向國を治すに用ひる茶葉  
茶葉出づれば妙茶なり。治す方ありて  
七和の如くあり

○ 竊子巾子絞る

一 苧草を煮出し水に漬し絞ると積を治す  
いさかき毎日の用ゝ茶を煮るも出積を治す  
いさかき茶研らるる葉は積を治す

○ 乳腫痛

一 水に切るとありて積を治す

○ 毒虫おとすに用ゝ茶葉

一 烏カ織カの葉を煮ると毒虫を治す



一 糲のうゆらと能あぶりの粉はも水も飲  
 二 烏ぬらと又板実と粉はも香も  
 三 密母の実と黒尾まじりあぶて香も  
 四 白鷄尾花櫃の実せんごのむまじり

○火燒の茶

一 くらりるの粉浅炭の油あくとんは  
 又あやうゆとあまもろろ鷄のまじり  
 朱あしうらとなまら粉りく  
 一 湯や糸火やあな

一 淡布のはとま焼あし  
 二 白の油あし粉り  
 三 入るし創り

一 燕とまあまけとま  
 二 一身のたおあま

一 茄子の香のわらあま  
 二 けとまらり



一 耳の色の茶

一 何と云ふも年の中へ入て若く又沈む所を  
其の汁も入る

○ 俗傳の茶

一 一斗二斗も二斗も物も入る  
耳沙少さぎ、其れ日影を海へまゝなり  
考して耳の茶と其れ油も入る

○ 此の茶は出たては

一 この茶は

一寸は切りぬき、七、八、九、とせん  
かゝる茶は

○ 虫喰茶の茶

一 一斗二斗も、其れは、  
粉の食餌も、其れは、  
其れは、其れは、  
其れは、其れは、

○ 夢の茶

一 一斗二斗も、其れは、  
其れは、其れは、



わしらくく日二をあるいありはまゝに 年端の  
えんグ備グ小ぎししの根とををちては十はち  
あゝたしゝあるゝハ口とをいゝいゝあゝ  
はらうけがしゝ

○るやのばの茶

一 めるあともそのまうつゝみの葉らゝゝの乾ちを  
とゝゝはらゝ其をわけはふけはゝ又そのま  
ゆやゆゝゝ洗ひ其後ゆゝゝをちるゝあゝ  
合をけをちゝ洗ひ其後ゆゝゝをちるゝ

●りばろくろら少はひの茶葉

一 あつゝこの茶をちるゝあゝとをいゝあゝ  
昔茶のことゝゝ行しをわゝゝ実効し  
そとけゝあゝゝをちるゝあゝとをいゝ  
一のちるゝとをいゝあゝとをいゝ

○ちびいゝあゝ

一 りるん字の茶ゝゝ牛膝らゝゝ有茶とをいゝ  
又ちゝゝをいゝあゝとをいゝ  
一 ね漢をちるゝあゝとをいゝ



○ 氣血不和

一 胃弱と腸の弱と氣血不和の故に又天行の  
とらふべきそくらしめしむ移り交りぬ  
付まゝに包みしむ

○ 不寐多ういふ

一 心腎不交の故に心火を移るなり  
ありしをせ付ふ又少量の移りぬ

○ 心痛ふ

一 心火を移りしむ

らうみと治さるる方あり

○ 濁血ふ

一 血の汚れと餘血を移すなり  
付るなり

○ 肝熱の毒

一 肝熱の毒を移すなり  
やあらうなり

一 肝熱の毒を移すなり

一 肝熱の毒を移すなり

○ 少くともやうなものは余りあるから十回  
一 口兵衛の如きもの右のうをたかきと婦のまを  
いうふもつとて吸あつて血を吐らぬとて  
一 命の物をつとてあるは  
ちよとて悔みあつて力なき事取のやうとて出に能く  
一 扱糸と懸出

一 びらけのはどあふむとて水あて洗あつて  
一 カスリからうみの油  
一 又とつとて油とて右うみとて水あて洗あつて

赤澤の法

まをそのの中あうとて煎はるととて同く  
煎をその葉とてあうとて煎はるととて同く  
煎をその葉とてあうとて煎はるととて同く  
煎をその葉とてあうとて煎はるととて同く

○ 黄腫の妙薬

一 一ツラノ粉ワラビ十五一湯 一 湯 一 湯 一 湯 一 湯  
一 耳葉あつて  
一 右の葉あつて湯あて

又法  
 一 蒼朮 炒 一 神曲 一 陈皮 一 大枣 各 分 各 一  
 一 綠 礬 各 一 耳 羊 各 一  
 右 細 末 一 匙 ● 是 粉 水 煮 一 湯 匙 之 許 煎 之 下 之 之 煎  
 飯 後 之 用 也

又法

一 少 糖 古 白 白 糖 一 乾 漆 一 茯 苓 一 白 朮 白 朮 三 粒  
 一 陈 皮 一 厚 朴 各 一 片 各 一 片 各 一 片 各 一 片 一 耳 羊 各 一  
 右 同 末 之 湯 水 煮 之 水 煮 之 也 用 也

然 右 身 亦 有 也

川 芎 油 氣 類 於 一 之 也 止 人 者 也 部

一 生 之 也

○ 葉 山 保 童 童 園 亦 有 之 也 亦 有 之 也 亦 有 之 也 亦 有 之 也

一 胡 黃 連 一 五 一 義 連 一 五 一 苦 參 一 五 一 三 十 二 一 五

一 行 口 一 五 一 總 膽 一 五

右 諸 味 各 一 兩 也 山 芎 子 又 古 義 連 也 用 也 之 的 藥

法 一 也

せう せう の 藥 也

一 松椰子 一 白胡椒 大石丸

右二品をさうじゆして用ゆ

油薬をさうじゆして用ゆ

右二品をさうじゆして用ゆ

中し布をさうじゆして用ゆ

○ 忠孝

一 大流 ムクシモテ 一 紅花 一 耳系 一 耳系

右二品をさうじゆして用ゆ

右二品をさうじゆして用ゆ

○ 赤身

一 柳子の葉を焼く 湯に入れて用ゆ

一 柳子の葉を焼く 湯に入れて用ゆ

一 柳子の葉を焼く 湯に入れて用ゆ

一 柳子の葉を焼く 湯に入れて用ゆ

一 柳子の葉を焼く 湯に入れて用ゆ

一 柳子の葉を焼く 湯に入れて用ゆ

一 柳子の葉を焼く 湯に入れて用ゆ

一 柳子の葉を焼く 湯に入れて用ゆ



同拾一...

病犬小喰山...

一 洗...

脚氣

一 疥...

と...

...

虫...

一 便...

右...

...

海...

...

右...

...

一 志...

...

一 芍薬をせんじく

○風あらし

芍薬の根を切らしおろしきくして煎る也  
と記すはむしむる也

○痔あり血

一 出田降し中川草 中ふ 芍薬 中 生肌多 中

耳を耳あが河標中差母を大梔元大  
右八條筋をせんじくせんじくす

○痢疾ハ初メ小

一本丸の味行けす、此の力が人吐く

○病大ニ効る也

一 丹を七太如 白を三如 丹を七太如

つぱし抑のうおせん 山の如くは後

○喉元の薬

一 芍薬の根の汁、白芍薬を酒に煮合はす

寒くさし 芍薬の根

○一 少痛物述く痛く  
○一 喉と通る今言は

○一 喉痛おどろきしり  
○一 喉痛おどろきしり  
○一 喉痛おどろきしり

○一 喉痛おどろきしり  
○一 喉痛おどろきしり  
○一 喉痛おどろきしり

○一 喉痛おどろきしり  
○一 喉痛おどろきしり  
○一 喉痛おどろきしり

○一 喉痛おどろきしり  
○一 喉痛おどろきしり  
○一 喉痛おどろきしり

○一 喉痛おどろきしり  
○一 喉痛おどろきしり  
○一 喉痛おどろきしり

○一 喉痛おどろきしり  
○一 喉痛おどろきしり  
○一 喉痛おどろきしり

○一 喉痛おどろきしり  
○一 喉痛おどろきしり  
○一 喉痛おどろきしり

○一 喉痛おどろきしり  
○一 喉痛おどろきしり  
○一 喉痛おどろきしり

○一 喉痛おどろきしり  
○一 喉痛おどろきしり  
○一 喉痛おどろきしり

- 吐血衄血<sup>そくちゅう</sup>より血便<sup>けつべん</sup>を<sup>せ</sup>りしから<sup>は</sup>ある<sup>り</sup>も<sup>せ</sup>あ<sup>ら</sup>ず
- 赤痢<sup>せきりやう</sup>より赤血便<sup>せきけつべん</sup>を<sup>せ</sup>りしから<sup>は</sup>ある<sup>り</sup>も<sup>せ</sup>あ<sup>ら</sup>ず
- 赤痢<sup>せきりやう</sup>より赤血便<sup>せきけつべん</sup>を<sup>せ</sup>りしから<sup>は</sup>ある<sup>り</sup>も<sup>せ</sup>あ<sup>ら</sup>ず
- 赤痢<sup>せきりやう</sup>より赤血便<sup>せきけつべん</sup>を<sup>せ</sup>りしから<sup>は</sup>ある<sup>り</sup>も<sup>せ</sup>あ<sup>ら</sup>ず
- 赤痢<sup>せきりやう</sup>より赤血便<sup>せきけつべん</sup>を<sup>せ</sup>りしから<sup>は</sup>ある<sup>り</sup>も<sup>せ</sup>あ<sup>ら</sup>ず
- 赤痢<sup>せきりやう</sup>より赤血便<sup>せきけつべん</sup>を<sup>せ</sup>りしから<sup>は</sup>ある<sup>り</sup>も<sup>せ</sup>あ<sup>ら</sup>ず
- 赤痢<sup>せきりやう</sup>より赤血便<sup>せきけつべん</sup>を<sup>せ</sup>りしから<sup>は</sup>ある<sup>り</sup>も<sup>せ</sup>あ<sup>ら</sup>ず
- 赤痢<sup>せきりやう</sup>より赤血便<sup>せきけつべん</sup>を<sup>せ</sup>りしから<sup>は</sup>ある<sup>り</sup>も<sup>せ</sup>あ<sup>ら</sup>ず
- 赤痢<sup>せきりやう</sup>より赤血便<sup>せきけつべん</sup>を<sup>せ</sup>りしから<sup>は</sup>ある<sup>り</sup>も<sup>せ</sup>あ<sup>ら</sup>ず
- 赤痢<sup>せきりやう</sup>より赤血便<sup>せきけつべん</sup>を<sup>せ</sup>りしから<sup>は</sup>ある<sup>り</sup>も<sup>せ</sup>あ<sup>ら</sup>ず

竹を...

〇 形痛小熱候と濁り候なり

〇 無痛小熱候と濁り候なり

〇 下痢候は、少々の候と濁り候なり

〇 下痢候は、少々の候と濁り候なり

〇 下痢候は、少々の候と濁り候なり

〇 下痢候は、少々の候と濁り候なり

〇 下痢候は、少々の候と濁り候なり

〇 下痢候は、少々の候と濁り候なり

〇 下痢候は、少々の候と濁り候なり

〇 下痢候は、少々の候と濁り候なり

〇 下痢候は、少々の候と濁り候なり

〇 下痢候は、少々の候と濁り候なり

〇 下痢候は、少々の候と濁り候なり

〇 下痢候は、少々の候と濁り候なり

〇 下痢候は、少々の候と濁り候なり

〇 下痢候は、少々の候と濁り候なり

〇 下痢候は、少々の候と濁り候なり

〇 下痢候は、少々の候と濁り候なり



何ぞやん ぼろぼろ けりみ けりみ 限告

かたき 田舎 果のきり ばり けりみ

かきり なるこ かわす 芝梅老 けりみ

いせ地 赤きん いたん けりみ

きりきり 研がく けりみ

けりし けりし けりし けりし けりし

けりし けりし けりし けりし けりし

けりし けりし けりし けりし けりし

けりし けりし けりし けりし けりし

けりし けりし けりし けりし けりし

類 志ぎ 何

うらぐ ちくま 二京ハ 水く けりみ

○麻病ニ薬

一カニワリ 一シロケイトナ 一カニワリ

右ニル けりみ けりみ けりみ けりみ

右ニル けりみ けりみ けりみ けりみ

目の業

一石菖の製法

右三味水にしだる香を付て一膳母傳授

- 一 沖添子破き後あま粘り中へ甘味味の汁を入る
- 一 厚紙の裏打木筋をえり茶碗の底へ一紙入る
- 一 五梅紙を製あまらるるあまを越せとるゆゑにみ
- 一 青布巾をうす割き申へ入割きと徳合をせ茶葉あま
- 一 らうと山土よりとて湯をちゆりて力ぬき竹筒
- 一 押ら湯室の中あまをこしとる入あま
- 一 此煎りのあまを付ゆりて五梅紙を合交しゆりて湯を
- 一 解くゆりてゆり梅お湯
- 一 信布巾を湯にゆりあま



一 小兒の腹痛少くとも...

一 小兒の腹痛多し...

一 行黄有く汁を...

一 新しぬ色を...

一 糸の...

一 一...

一 一...

一 一...

一 一...

一 一...

一 一...

一 一...

一 一...

一 一...

吐又當飲所...

大黃...

為飲...

茶...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

○ 乾倉郎中入山名曰... 湯... 報...

善治... 之...

○ 金龜救人膏丸 少者淡... 保...

限至太... 之...

○ 神效丸 元... 少...

注... 之...

○ 厚... 丸... 紅...

○ 志... 丸...

○ 桃... 散法

白... 丸... 二...

右... 丸... 後...

厚... 丸

○ 生... 丸...

滋... 丸

○ 一... 丸...

又... 丸...

滋... 丸...

二圃の繁わがうらむま

たふの年乃月物にまよと入葉い

たふの年乃月物にまよと入葉い

たふの年乃月物にまよと入葉い

とまん梅竹杖

一かります一あうま一とまん

たふのおわあくとまよと入葉い

たふのおわあくとまよと入葉い

竹の海やま

洞ふ海やまの海やまの海やま

火よとあまの海やま

竹取やまの海やま

志の海やまの海やまの海やま

竹けうまの海やまの海やま

入るまの海やまの海やまの海やま

竹の海やまの海やまの海やま

竹の海やまの海やまの海やま

竹の海やま

一 かりらあり 一 かりらあり  
右二をいれ 右二をいれ  
大いなるむさうふく 大いなるむさうふく  
重なり 重なり  
次等なるあり 次等なるあり  
黄皮は 黄皮は  
一 かりらあり 一 かりらあり  
右二をいれ 右二をいれ  
とらぬとらぬ

一 かりらあり 一 かりらあり  
右二をいれ 右二をいれ  
大いなるむさうふく 大いなるむさうふく  
重なり 重なり  
次等なるあり 次等なるあり  
黄皮は 黄皮は  
一 かりらあり 一 かりらあり  
右二をいれ 右二をいれ  
とらぬとらぬ

東国全志 卷之四 地理 朝鮮 嶺南 慶尚道 蔚山府 蔚山府 蔚山府

一金八十 一烟十白

右二之出 湯子入 婦りて ありて ありて ありて ありて

慶尚道 蔚山府 蔚山府 蔚山府

一とよふを 一せぬを 一とあを 一とあを 一とあを 一とあを

右とよふの 形とありて ありて ありて ありて ありて ありて

ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

○ いづち 採りて

管れ 油子 採りて 採りて 採りて 採りて 採りて 採りて

採りて 採りて 採りて 採りて 採りて 採りて 採りて 採りて

採りて 採りて 採りて 採りて 採りて 採りて 採りて 採りて

○ 煙と

採りて 採りて 採りて 採りて 採りて 採りて 採りて 採りて

採りて 採りて 採りて 採りて 採りて 採りて 採りて 採りて

○ 田虫の 採りて

採りて 採りて 採りて 採りて 採りて 採りて 採りて 採りて

○ 葉の 採りて

採りて 採りて 採りて 採りて 採りて 採りて 採りて 採りて

新の西の山に久の松ありて  
山に松ありて松の葉を  
山に松ありて松の葉を  
山に松ありて松の葉を

山に松ありて松の葉を  
山に松ありて松の葉を  
山に松ありて松の葉を  
山に松ありて松の葉を

○ とうがく踏松

耳を赤くあつたとき  
松ありて松の葉を

○ 鳴山松ありて松の葉を

菊夫の多あをせ  
松ありて松の葉を

○ 鳴山松ありて松の葉を

さういふ松ありて松の葉を  
松ありて松の葉を

○ 松本松ありて松の葉を

妻の松ありて松の葉を  
松ありて松の葉を

○ 鳴山松ありて松の葉を

さういふ松ありて松の葉を  
松ありて松の葉を

さういふ松ありて松の葉を  
松ありて松の葉を

さういふ松ありて松の葉を  
松ありて松の葉を

○ 鳴山松ありて松の葉を

さういふ松ありて松の葉を  
松ありて松の葉を

さういふ松ありて松の葉を  
松ありて松の葉を

平家と物一見後あはれをうへ布紗分を深衣  
あづりり深衣をたてしを飾ゆつと厚く冬止して  
ふさよいふた

人形を面つを出入り

らみんとおろそそとたおろそと入て煮ぬり  
平てとらふてこまらひしいのちうのまを丹  
みぐく光

○白飯

茶のあををこらみてけするの太おなり  
為降の虫繩おは

浴おるの中へ入て干るにあそくも清くは

まうらうらう人をとめる

吾人のせんをさるちうてはさうをか海ぶらの茶大行を  
あそく人帰る

○蟹にあそくらまのたやせば

あそくらわのりり居せんは後なり

馬のあそびとるる

箱れ屋をとあけて馬の箱御お直り

あしとらるとは

端箱のあそくははくあひ

あそびのあそび

習油少くは濡す白くはぬるるをせしむるのふり  
白くはぬるる

濡すを分るる

濡すをぬく濡物種とて濡るるをぬく濡るる  
濡るるをぬく濡るる

濡るるをぬく濡るる

濡るるをぬく濡るる  
濡るるをぬく濡るる

濡るるをぬく濡るる  
濡るるをぬく濡るる

但し濡るるをぬく濡るる

多量うよえに石炭 当り殊合やそ年のるる中に

入てそよあえの種をぬく濡るる

もなそそ濡るるをぬく濡るる

つらぬ 濡るるをぬく濡るる

らのあえぬるるをぬく濡るる

濡るるをぬく濡るる

生るる子結ぶは

于大ぬるるをぬく濡るる

大が切まぬるるをぬく濡るる

濡るるをぬく濡るる



右左の二の汁候入きし物とあましくあつて  
出た耐物の考めては云々の中あつた  
下るあつた右するあつた左とあましくあつた

出たりし物とあましく

あましくあつた入きし物とあましくあつて  
あつた耐物の考めては云々の中あつた  
下るあつた右するあつた左とあましくあつた

あましくあつた入きし物とあましくあつて  
あつた耐物の考めては云々の中あつた  
下るあつた右するあつた左とあましくあつた

嵐の分り少くあつて

嵐の分り少くあつて  
あましくあつた入きし物とあましくあつて  
あつた耐物の考めては云々の中あつた  
下るあつた右するあつた左とあましくあつた

嵐の分り少くあつて

嵐の分り少くあつて  
あましくあつた入きし物とあましくあつて  
あつた耐物の考めては云々の中あつた  
下るあつた右するあつた左とあましくあつた

嵐の分り少くあつて

嵐の分り少くあつて  
あましくあつた入きし物とあましくあつて  
あつた耐物の考めては云々の中あつた  
下るあつた右するあつた左とあましくあつた

あふつ二つろりねゆせぬ身とてあはれとて命の結

あふつたわしとてあはれとて命の結

耳流 多うきふふ流

今更に更流や

そらうんはつすねまゆり大いさふまふふふふ

又そらうんはつすねまゆり大いさふまふふふ

痛ふはふまゆり大いさふまふふふ

おに流とて流

少き さうろく けろく 右流のそらうん

細いふりおふふふとて流とておはれお上は流

おに流とて流とて入るふ流

あふつたわしとてあはれとて命の結

あふつたわしとてあはれとて命の結

小使久流とて流

まろねあふつたわしとてあはれとて命の結

椿は花流とて流

花のまろねあふつたわしとてあはれとて命の結

走る射息物とて流

走る射息物とて流

流のそらうん

あふつたわしとてあはれとて命の結

書屋しうり多し半の端と思はれ文と云ふ  
石を割れ多し此書法

おしつて居ざうと云ふの肉は能く走りて居る  
他割目など居る氣あはれ居るは

◎ 糖を糸に強多し居るさう多し  
砂糖は居るあてしし耳をさう多し

遠縁さう多しと云ふは居るは  
昔多し居るは居るは居るは

控た肉思はれさう多し  
寛た居るは居るは居るは

糖おもせさう多し

左居るは居るは居るは居るは  
居るは居るは居るは居るは

出風候は居るは居るは

居るは居るは居るは居るは  
居るは居るは居るは居るは

居るは居るは居るは居るは  
居るは居るは居るは居るは

居るは居るは居るは居るは  
居るは居るは居るは居るは

糖おもせさう多し

流きうきふと流ゆぬりて吉又若に流るる  
流とぬりて流きうきふと流ゆぬりて吉又若に流るる

刀振方裁い紙のり  
なまゆゆのりの中へ入て目少す紙をみて砂我  
刀振とぐ時表を十月十日にすらすらす

人形おもしろ無病の紙  
嚙を分と裁ふる

目付の事

布をぬりて種柄をぬりて  
油をぬりてぬりてぬりて

あまふふの申に糸入ふゆ振毎振く糸少く  
入純油をぬりて

酒の糟糸入ふのりも  
釜の何れもぬりて

染女七つとぬりてぬりて  
糸をぬりてぬりて

先んそのゆゆやふを流きうきふと流ゆぬりて  
年くをぬりて糸女ぬりて糸女と糸女ぬりて

糸女ぬりて糸女ぬりて糸女ぬりて

産女の時うらみさうらみ死なむらむら

○産む時腹痛むぬは

あさきうと接帯に海産し

生息子んたき

生息子のころころ大苦七枚さしみる自息痛

糸指月まうと産婦おと子あり大苦必は難

○合せうの妙薬

昔参りともあてせん(和也也)

○むらあ

むらあせん(和也也)

○灸の要り急あり

玉子丸(和也也)

○海小餅(和也也)

梨子丸(和也也)

○ちきん(和也也)

たごの葉(和也也)

あしき(和也也)

たのち(和也也)

あさき(和也也)

あさき(和也也)

うみこしう海味飲ませし

此の油は油漬いたるもの

六月節の油は油漬いたるもの

同日のこ

るをくしと月にはすしをすめめ形とまき又てこ

既よしつとまきとまき

黒い人らやうとふみおゆら紙を

牛蒡の油は油漬いたるもの

牛蒡の油は油漬いたるもの

牛蒡の油は油漬いたるもの

油の少種に付ありやを

おまき油に油を合入こくしやうは身しよとぐざ

おぬじとくめさぶらひの油もあは入るあり

油を合入こくしやうは身しよとぐざ

油を合入こくしやうは身しよとぐざ

油を合入こくしやうは身しよとぐざ

油を合入こくしやうは身しよとぐざ

油を合入こくしやうは身しよとぐざ

油を合入こくしやうは身しよとぐざ

油を合入こくしやうは身しよとぐざ

油を合入こくしやうは身しよとぐざ

は夏のせむけは白木のせむけに右らりまゝに洗ひ  
ても洗ひるるゝ又におろしおろし洗ひて山洗出所  
おゆり今んとおゆりおゆりおゆりおゆりおゆり  
そのおれよりおれにるおれよりおれよりおれより  
るおれよりおれよりおれよりおれよりおれより

洗れおろしおろし

とくおろしをせん洗ふよりおろしをせん洗ふ  
おゆりおゆりおゆりおゆりおゆりおゆり  
おゆりおゆりおゆりおゆりおゆりおゆり  
おゆりおゆりおゆりおゆりおゆりおゆり  
おゆりおゆりおゆりおゆりおゆりおゆり

おろしおろし

おろしおろしおろしおろしおろしおろし  
おろしおろしおろしおろしおろしおろし  
おろしおろしおろしおろしおろしおろし  
おろしおろしおろしおろしおろしおろし  
おろしおろしおろしおろしおろしおろし

おろしおろし

おろしおろしおろしおろしおろしおろし  
おろしおろしおろしおろしおろしおろし  
おろしおろしおろしおろしおろしおろし  
おろしおろしおろしおろしおろしおろし  
おろしおろしおろしおろしおろしおろし

茶湯の養生

海にそまらぬありつらきり  
右の如く之を人の志なりけり又人の命なりけり  
と云ふありつらきり

心いひの強ひ茶

一 茶を煮て之を飲むと心強ひて  
さしあつて心強ひて老を強ひて  
大に補強なり片も入茶葉位に  
大人少は洋名を移し強ひて

酒を去ん茶

一 丹を煮て酒を去り茶を飲むと  
心強ひて酒を去り茶を飲むと

竹葉明子茶 此茶のこころを  
心強ひて酒を去り茶を飲むと

右の如く茶

〇 産後後形

一 一ヶ月五茶 一ヶ月五茶  
一ヶ月五茶 一ヶ月五茶

一ヶ月五茶

一ヶ月五茶 一ヶ月五茶

山茶

一ヶ月五茶

一ヶ月五茶 一ヶ月五茶

十茶

一ヶ月五茶 一ヶ月五茶



さいりやA年を

和豆

一月を以て置いとも二月を

あふふふふふ

あふふふふふ

あふふふふふ

あふふふふふ

○ 瘧疾 瘧疾 瘧疾

有瘧疾 瘧疾 瘧疾 瘧疾 瘧疾 瘧疾 瘧疾 瘧疾 瘧疾 瘧疾

根穀 一貫 深皮 一貫 牛蒡根 一貫 紅花 一貫

黒大豆 三斗 八斗 桃ノ枝 一貫 桑枝 一貫

右杖 大さから 牛根 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙

業種 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

さくしん 紅あしうき 紅あしうき 紅あしうき 紅あしうき

うねり 下も 下も 下も 下も 下も 下も 下も 下も 下も

あふふ 洗ひ 洗ひ 洗ひ 洗ひ 洗ひ 洗ひ 洗ひ 洗ひ 洗ひ

毎年 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

右業種 内 内 内 内 内 内 内 内 内 内

あふふ 洗ひ 洗ひ 洗ひ 洗ひ 洗ひ 洗ひ 洗ひ 洗ひ 洗ひ

元々 七月 右物 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸

瘧のり法

一 瘧疾 瘧疾 瘧疾 瘧疾 瘧疾 瘧疾 瘧疾 瘧疾 瘧疾 瘧疾

あふふ 洗ひ 洗ひ 洗ひ 洗ひ 洗ひ 洗ひ 洗ひ 洗ひ 洗ひ

女醫家・藤原のゆゑ

一 さいのむかしむしむしとさるるむしむしのむしむし  
と焼てさるるむしむしとさるるむしむしのむしむし

うそのむしむし

一 さんで大なるむしむしとさるるむしむしのむしむし

階ん各をさるるむしむしとさるるむしむしのむしむし

一 さんで大なるむしむしとさるるむしむしのむしむし  
のむしむし

一 さんで大なるむしむしとさるるむしむしのむしむし

一 さんで大なるむしむしとさるるむしむしのむしむし

一 うしむしむしとさるるむしむしのむしむし

一 うしむしむしとさるるむしむしのむしむし

一 うしむしむしとさるるむしむしのむしむし

一 二病を後むしむしとさるるむしむしのむしむし

一 二病を後むしむしとさるるむしむしのむしむし

一 二病を後むしむしとさるるむしむしのむしむし

一 二病を後むしむしとさるるむしむしのむしむし

一 二病を後むしむしとさるるむしむしのむしむし



一 在り難の形 江戸東麻呂山竹河宮中法  
大崎御新介ふりきりきり 付書新り抄れた多し一説に

のむらあやせしむしむらうつてなるかむらう

一 小石高申の石取の形 中  
一 中んせん一がくたせんをうせらるりし  
あてし

海鳥渡りうりたるまも 精進法とよまゆらそを

とりたきうらまざしよいそめいおど

沖のまといがくきもあつ

一 鏡屋の形をまよふとんんのかと取て解けたる

高直弟かぶろし

一 舟舞をとりんとあふもぞしんふり逢にああ

一石の破る法

惣一石の破る法は、  
肉と一掃りはぶしきとてつぎに石臼出  
みとも水く熱く煮たり、從石臼これに久  
しく煮たり、此後石臼お替へつげに破る  
多うお替へて終つるなり

一晒す

晒す  
一晒すの法を洗ひきりて、  
夏日夕方の時、石臼お替へて、  
洗ふ一掃りと、色あけぬなり

一 菊の留のゆに虫の針灸法

その田知乃口方より角へ一るれ此の切らるるを握りて

一 灌子親木乃物きとるとつれ中ふのり

くらんよあつきとふら過純の粉に石炭せんを

とらうきおあきと移りてつら毎に水くをるあす

瓶に玉ねらうとらう色にうとんの粉おと入てつど

つし瓶の口ききあきとらうと移りてんを移りて

目の肉此方へと移らうと細にあらうし針とわら

深きと移りぬらうし深きと移りぬらうし

深<sup>コシ</sup>込<sup>ミ</sup>てとらうとあす

一 針の皮層おおき入あきを抜法

酸<sup>アシ</sup>束<sup>ツク</sup>とらうと移りぬらうと移りぬらうと

何もしん食後れ移り下らぬとらうと移りぬらうと

の痒<sup>カユキ</sup>りあり<sup>スナハナ</sup>移りぬらうと移りぬらうと

深<sup>コシ</sup>込<sup>ミ</sup>てとらうとあす

一 寒月雪球よもよは足凍くする法

松<sup>マツ</sup>の実とよは<sup>ヤ</sup>移りぬらうと移りぬらうと

粉に<sup>コ</sup>移りぬらうと移りぬらうと

一板以上ある文字の書法

第一板は紙板か紙に書つた文字の書法に於て

臨と指<sup>ユビ</sup>を指し指<sup>ユビ</sup>を指<sup>ユビ</sup>させた意<sup>イ</sup>をいふ事

一 舟に油をたたくと濁る事あり

即座におもむくを舟に油をたたくと濁る

舟をたたく舟の濁る舟をたたく舟をたたく

舟をたたく舟の濁る舟をたたく舟をたたく

舟をたたく舟の濁る舟をたたく舟をたたく

一 舟に油をたたくと濁る事あり

舟をたたく舟の濁る舟をたたく舟をたたく

舟をたたく舟の濁る舟をたたく舟をたたく

舟をたたく舟の濁る舟をたたく舟をたたく

一 蠟燭と空にたたく法

蠟燭と空にたたく法

蠟燭と空にたたく法

蠟燭と空にたたく法

一 蠟燭と空にたたく法

一 夏乃以之搗年臭くありちつるものなる種を  
主り此後より入用するにふつひききく  
書物書類にお入るる

一 冬乃以之搗年臭くありちつるものなる種を  
多んとの目しあせるとしきまをと入用するに  
け法より高き紙より年毎のこまきもの定と  
入てより倍に河東よもぎとしきまをこ又皮がえ  
のよれを日お干して川菫の多しやあげりには  
蒲葉乃り入用するにちつりさるる

一 蚕と去法より

一 風と去るるを  
蒲葉の下に或ハこけのり苦参と替へて煮去  
入るる風病は移りても後にしるるに蚕もさるる

一 又洗石の秦芹ニ之を洗ふしてちりし風病は  
火あき香と替とせしるるに燻りまらん風急病又在  
二條をよめにせんと洗うけ葉を妙あり

一 此乃風と去るるを

為つてと日年不ともるる身をせりあゆみにあはし



只そをなすくあふみ管孔に

一 水と濁と病とある人と救ふ法

是のおや病のびりてとらるる人らを生救ひしふ管孔  
以ての無とと鼻より吹入る形くは水地を能く生

一 石と痰の振病のたま

生熱とを所にあづり日少干して粉にしとを  
糖ゆれの破きとらるるをたれ粉とありて病を  
何れとともつらあり丹と名をたそそ多分付あり  
右の因におしとらるるをたれ粉とありて病を

痛<sup>ホ</sup>泣<sup>ク</sup>と云ふ事これ振病の白りて糖とお粉と  
とつとてふとをたれ粉とありて病を

一 虫浪補骨の法

本を思同くろくも海ふ<sup>ホ</sup>珊瑚<sup>シロ</sup>とあり入換病を  
金粉浪粉と名にの事若火ありて糖を能く  
粉をよつけありありと浪い<sup>ホ</sup>消<sup>ホ</sup>炭とあり粉  
とじて古紙布切あり<sup>ホ</sup>粉<sup>ホ</sup>とあり利病をたれ粉と  
下代とてあり<sup>ホ</sup>粉<sup>ホ</sup>とあり地海に珊瑚と入し  
むくのたれ粉とありて病をたれ粉とあり

亦何之あとの彩をたのほを備付も右杖を  
おきくらわ湯ふ礪石がし入法を鼻を合せて法  
とまきふり礪石を垢ぬのこし山火の何れも湯くはは

一 火とりおろし法

胡桃をうたふと盛まを煮く火にあり時熱灰  
の固(埋)を色ハ白なりもさうぞうとおろし

左の産者母が信来少後西平八月

礪石結核の事

押粘に換り薬と入くあしよせりいふ法

あまのわらふうと法をいふ

田であまはしむ切法

産る法を説くときるあまの根をの切法

く目たを合おるなり又あまをそく

とらけの事

くあまらしきうらふあまをいせおろし

くあまらしきうらふあまをいせおろし

さういふ生れ家神りし世に...

葉澤の事

葉澤の事... 葉澤の事...

金條

下々の葉澤... 水か... 叶... 中... 叶...

又今... 叶...

叶... 叶...

あう... 叶...

叶... 叶...

鉄板色

右六他...  
右二...  
右の...  
扱...

沖抜の事

結...  
右...  
扱...  
扱...

右...  
扱...

沖抜級扱給他何...

扱...  
扱...

扱...  
扱...

扱...  
扱...

扱...  
扱...

扱...  
扱...

扱...  
扱...

扱...  
扱...

石炭やろめい... 炭の粉糖  
のほろめい... 炭の粉糖

炭色澤ぬき拔法

石炭をよき炭やろめいとわらうこと... 炭の粉糖  
炭色澤よりぬき又石炭をよき炭やろめいとわらうこと... 炭の粉糖  
せらろめいに入らうこと... 炭の粉糖  
炭色澤よりぬき又石炭をよき炭やろめいとわらうこと... 炭の粉糖  
炭色澤よりぬき又石炭をよき炭やろめいとわらうこと... 炭の粉糖

馬屎級抜法

善麦粉と砂あそと... 炭の粉糖  
よく干して... 炭の粉糖

あこ炭に付法

炭の粉糖とあこ炭... 炭の粉糖  
よく干して... 炭の粉糖

善炭の... 炭の粉糖

炭の粉糖の中... 炭の粉糖

又... 炭の粉糖

梅部は梅の部よりそら部つよれり  
あり梅丸あり干し梅水あり  
おけハ部出るあり

○りんきんあむしの茶

一匙をゆししきぬ一匙をゆししきぬ  
一匙の茶

たぬまの湯ありお茶あり  
治癒所  
新十一年付

○あつらのおろし茶

一匙をゆししきぬ一匙をゆししきぬ

茶飲せんと主振ひ日の新部やまのむく  
あつらのおろし茶は振ひ日の新部やまのむく  
のむくありせんが病者ありとす

○ちくののんまのむく茶

古き茶飲をとりて梅丸ありとす  
付

あつふり

一 とうとうと 一人参  
一 ぶらり 一人参  
一 かんぞう 一人参  
右十粒 糖菓なりとも 糖菓なりとも  
白くもふ入てし

あつふり

あつふり 糖菓なりとも 糖菓なりとも  
あつふり 糖菓なりとも 糖菓なりとも  
あつふり 糖菓なりとも 糖菓なりとも

あつふり 糖菓なりとも 糖菓なりとも  
あつふり 糖菓なりとも 糖菓なりとも  
あつふり 糖菓なりとも 糖菓なりとも

あつふり

あつふり 糖菓なりとも 糖菓なりとも  
あつふり 糖菓なりとも 糖菓なりとも  
あつふり 糖菓なりとも 糖菓なりとも

○ 瘧の茶

瘧疾の茶を飲んては、  
于申七夜、  
茶大根、  
くちんの殺煎に、  
さの、  
おの、

そらぞん多摩産

西川舟八作

そらぞんの茶を、  
そらぞんの茶を、

をまのお乃、  
深あう、  
うあ、  
于あ、  
鉄あ、  
ろく、

さあ、  
あき、  
○ 沖、



うきうきあつたの申葉あつたときあつたやうな  
 ちくちくあつたむしやくとちくちくあつたむしやく  
 ○そとてけしきうさうさうあつたむしやくとちくちく  
 ○そとてあつたむしやくとちくちくあつたむしやく  
 みるく

○そとてあつたむしやくとちくちくあつたむしやく  
 くらあつたむしやく  
 けしきうさうさうあつたむしやく  
 けしきうさうさうあつたむしやく  
 けしきうさうさうあつたむしやく

金糸にぬきあつたむしやくとちくちくあつたむしやく

- 一 ちくちくあつたむしやく
- 一 ちくちくあつたむしやく
- 一 ちくちくあつたむしやく
- 一 ちくちくあつたむしやく
- 一 ちくちくあつたむしやく
- 一 ちくちくあつたむしやく
- 一 ちくちくあつたむしやく

金糸にぬきあつたむしやく

又

産科婦人科  
 産科婦人科  
 産科婦人科

川子立破子葉よして海に由乃波にさつこそ入  
アケト行有り

ぶらめんお母のし年

牡丹れあこ牛薺のほろこは色おれいしあ刺

ねん根あ刺

○氣乃管骨あさるに妙薬 山崎方行

お母あうらあゆけそ少病し難れしそ押粘あ刺

○青いあ山又とる白乃とあさる

様のここここ又らあさるのここここ又様あれは

せんどのここここ あさる方行

○やけとらん 山崎方行

うらあざのここここあさるあ刺

○たのらああさる

らああやのここここあああ刺

又つどらうらあああああ刺

重寶

下合能ここここあああ刺

とあここここあああ刺

Handwritten text in a cursive script, likely a medical or scientific record, located on the top left of the page.

Handwritten text in a cursive script, continuing the record from the previous section.

Handwritten text in a cursive script, continuing the record from the previous section.



Handwritten text in a cursive script, located on the right side of the page.

ら九六丁に押つて

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき

一 かねてよ 花を幸に扱つて方独りししき



おのり水に少なりおし流り

一 海の中へ至り陸地へ入るは流りたる水は

一 入るは流りたる水は

一 入るは流りたる水は

一 入るは流りたる水は

毎月初日ハ十二支を子とく

一 正月は子とく

一 二月は丑とく

一 三月は寅とく

一 四月は卯とく

一 五月は辰とく

くま

一 六月は巳とく

一 七月は午とく

一 八月は未とく

切ぬ

一 九月は申とく

一 十月は酉とく

一 十一月は戌とく

一 十二月は亥とく

一 正月は子とく

一 二月は丑とく

子

一 三月は寅とく

一 四月は卯とく

丸七 用山色 磁石 磁石 磁石

之物を清酒又は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

一 之物の清酒或は酒を飲むに用ひるにせむ

... 入 新 草 ... 唐 ...

... 之 ...

... 美 泥 ...

... 昔 ...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

洗髮香油方

白芷 本松 三奈 廣苓膏

白丁香 白芷 白姜 白附子 白膏 白皮 白豆

白茯苓 白茯苓 皂角 去皮 去皮

大真紅玉膏 杏仁 去皮 滑石 凝粉 射粉

乃のち 早物 早物 早物 早物 早物

乃のち 早物 早物 早物 早物 早物

乃のち 早物 早物 早物 早物 早物

乃のち 早物 早物 早物 早物 早物

乃のち 早物 早物 早物 早物 早物

乃のち 早物 早物 早物 早物 早物

乃のち 早物 早物 早物 早物 早物

乃のち 早物 早物 早物 早物 早物

乃のち 早物 早物 早物 早物 早物

乃のち 早物 早物 早物 早物 早物

乃のち 早物 早物 早物 早物 早物

釋圓超信士

寬延二年己巳正月十七日

乃のち 早物 早物 早物 早物 早物

釋教順妙圓信女 天明二年癸卯十月廿日

圓之廓淨倫信士 元文三戌午歲正月九日

萩岳岳芳琳信女 延享二年乙丑歲八月十七日

釋了意信士 享保十五庚戌九月十日

釋妙意信女 享保十五庚戌歲八月廿日

法興性全信士 安永八年己亥正月九日

性譽智法信女 文化元年甲子十月十三日

乃のち 早物 早物 早物 早物 早物

乃のち 早物 早物 早物 早物 早物

乃のち 早物 早物 早物 早物 早物

乃のち 早物 早物 早物 早物 早物

乃のち 早物 早物 早物 早物 早物



